

アキレウスの死

クイントゥス『トロイア戦記』から

松田 治

一 はじめに

人の死にかたは様々である。悪人が布団にくるまって大往生を遂げたり、生前は仏の与三さんなどと仇名された好人物が暴漢に襲われて横死したりとか、数えれば限りがない。人の数ほどである。風変わりな死にかたが有難いわけではないが、「生前の人となりを思わせる姿で死んだ」というのが最も平凡なところであろう。その意味では、小稿で話題にするアキレウスなどは平凡きわまりない形でこの世を去ったものといえよう。

アキレウスはトロイア戦争で敵をさんざん殺しまくり、そのあげくにもずからも平原の黄塵にまみれてことされる。英雄伝説の主人公としてはまことに典型的な死のドラマを演じている。英雄は偉業を果たしたのち死ぬ、という型を、ホメーロスはア

キレウスによって定着させた。アキレウスは西欧文学の原頭に位置する『イーリアス』の主人公であるから、以後の文学史を彩る数多の英雄物語の主人公の祖型になった。

ここではクイントゥス著『トロイア戦記』の第三巻で語られる「アキレウスの最期」の段を取り上げ、誰が英雄を倒したか、といったことをクイントゥスの文章をもとに述べる。その前に、ヘクトールを倒したあと英雄が対峙する主なアンタゴニスト二人、および、第三巻の構成に軽く触れておきたい。

二 ペンテシレイアとメモノン

トロイア戦争の前半で、トロイア方の主将を務めて奮戦したのは、ヘクトールだったが、奮戦空しく彼はアキレウスの軍門

に降つて世を去る。トロイアの城都はアキレウスの影に怯え、憂色に包まれる。そこへペンテシレイアが現れる。ペンテシレイアは女性だけから成るアマゾン族の女王で、プリアモスの招請に応じて、遠路をいとわず、軍団を率いてやってきた。

ペンテシレイアは軍神アレースの娘で、その武勇は父親譲りだったから、ギリシャ軍を思いのままに蹴散らした。やがて女王はアカイア軍中で並ぶ者のない戦士アキレウスにまみえた。とはいえ、彼我の力量の差はいかんともしがたく、ペンテシレイアは乗馬もるとともにアキレウスの槍で串刺しにされ、戦場の露と消えた。女王の兜を剥ぎ取ったアキレウスは、頭われ出た美貌に茫然となるが、後の祭りである（以上、『トロイア戦記』第一巻）。

トロイアは敗色濃厚となった。そこへ、夜と朝のあわいの空を飾る星のごとく颯爽と登場したのは、エチオピア王メモノンである。これは暁の女神エーオースの子であり、老王プリアモスの甥にあたる。プリアモスはこの甥の武勇に起死回生の望みをかけていた。メモノンは武勇と節度を兼ね備えた英雄で、大軍団を率いてひた押しにアカイア勢を押しまくる。そのなかでアキレウスの親友アンティロコスを残留める。アンティロコスはペロポネソスの町ピュロスの王ネストールの息子で、強敵に襲われた父親の前にとび出してわが身を捨て、孝心の鑑とたたえられた戦士である。老いたる英雄ネストールに請われ、また親友を殺されたことでもあるし、アキレウスはメモノン

と刃を交える。「不吉にも、不和女神が戦鬪の釣り合いを天秤で計った。もはや釣り合いは保たれていなかった。」こうしてトロイア方の多大な輿望を担っていたにもかかわらず、メモノンまた平原をわが血で汚す結果に終った（以上、『トロイア戦記』第二巻）。

第三巻はメモノンの死をうける。アキレウスは休む間もなく敵勢に追い打ちをかけ、トロイアの城門まで迫る。守りの固い門を突破して中へ飛びこまんばかりの勢いだった。そこへアポロンが現れ、アキレウスを仕留めてしまふ。ギリシャ軍はアイアース、オデュッセウスを中心に偉大な僚友の遺骸を守り、陣営に運び去る。幾日もの間この遺骸の回りで愁嘆場が繰り広げられ、そのあと盛大な葬儀が営まれ、ヘッレスポントスに臨む岬に巨大な墓が建てられる。ここで第三巻は終る。

三 誰がアキレウスを殺害したか

アキレウスはトロイア戦争を通じて最大最強の英雄であるから、その最期は、さぞや凄まじい一騎打ちがなされ、これが延々とつづいたあと、ようやく訪れるものと予想されたのであるが、意外にも、クイントウスの第三巻を読み進める途端に読者の目に飛び込んでくる。クイントウスは明瞭に神アポロンがアキレウスを倒したと述べている。

アポロンは英雄が際限なくトロイア勢を倒すのに業を煮や

し、オリュン波斯から降りてアキレウスの前に立ち、すみやかに戦場から離れるよう勧告する。アキレウスはこの神の声を無視して敵の軍勢を追い回す。堪忍袋の緒を切った神は、雲に身を隠したまま必殺の矢を繰り出し、アキレウスの唯一の泣き所であるくるぶし（いわゆるアキレス腱）を射抜く。従って『トロイア戦記』ではアキレウスに直接手を下したのはアポローンであると明記されている。それをなぜここで事々しく取り上げるかといえば、実は古くからアキレウスをめぐる神話では、その殺害実行者について三つの説があるからである。

1 アポローン単独で。

2 パリス単独で。

3 アポローンとパリスの協働で。

フランシス・ヴィアンは1のアポローン単独説を最も膾炙した伝説であるとしている¹⁰⁾。むろん『イリアス』でも語られている。

母がわたしに語ってくれた話では、わたしは武器を鏝うトロイエ人の城壁の下で、アポロンの疾い矢に倒れるということでした¹¹⁾。

これはアキレウス本人が語ることで、いわゆるテティスの予言である。息子の天逝を知っていた母テティスは、これを避けるべく、幼い子をスキューロス島へ送って世から隠したつもり

だったが、この母心は無駄に終わった。

この話題は悲劇にも見られる。まずソポクレスの『ピロクテテース』で、謀計を胸に秘め、レームノス島を訪れて話しかけるネオプトレモス（アキレウスの息子）に、ピロクテテースは「アキレウスは死んだのか。」と問いかける。これにネオプトレモスは

死にました。人間の手にかかったのではなく、神の矢に射られたということです。ポイボス・アポローンが倒したのです¹²⁾。

と答えている。弓の名人ピロクテテースは十年間ギリシャ軍と離れて、この島で病を養っていたため、トロイア攻防の経緯を知らない。アキレウスの戦死を知って驚くのである。神の手にかかったことについては、「では、倒された者ばかりでなく、倒した方も立派だったことになる¹³⁾。」と答える。

エウリーピデースもアポローン単独説を利用している。戦後アンドロマケー（もとヘクトールの妻）はネオプトレモスの端女となつて、アキレウスの故郷プテイアに来た。三角関係のもつれから命の危機にさらされた彼女は、主人（ネオプトレモス）がデルポイに行っているのので、急場の頼りにならないとこぼす。ネオプトレモスは以前、父親（アキレウス）を殺したのにはポイボスだと申し立て、その償いを求めたことがあり、神を面責するというこの時の狂気の許しを請うためにアポロンの

聖地に赴いたのである。

最後に、ローマの詩人ホラーティウスが、神と英雄の対決を格調高く述べている。

神よ、あなたが傲慢な口に罰を下されることは、二オペーの子供らと暴漢ティチユオスが身をもって知りまし、いや高いトロイアの征服者になりかかったプティアーアのアキレウスも知ったことです。

彼は、他の全てにまさる戦士でしたが、あなたにとつては相手になりませんでした⁵。

ここでホラーティウスはアポローンの名前もその弓矢のことも出してない。この文脈で誰が何をしたかは、当時の読者にとつては周知されていた。

四 アポローンとパリス

2 のパリス単独説を述べた古典の例は、多くはないようである。戦闘を単純に人と人のかかりあいとみるならば、アキレウスとパリスの対決としたほうが手っ取り早い。アキレウスはヘクトールを殺し、そのヘクトールの弟がパリスであるから。しかし古代ギリシャ叙事詩の世界では神々が人事に介入し、自由自在に戦場に出没した。人は、人を相手にするだけでなく、

神とも戦わねばならなかった。戦いの帰趨はむろん最初から見えていたわけだが。さて、パリスがアキレウスを倒したとする文例。

パリスは、あなた（ペーレウス 引用者注）の息子アキレウスを殺したのだが、そのパリスはヘクトールの弟であり、この女はヘクトールの妻だったのだから。

これは、娘ヘルミオネーをネオプトレモスの妻として与えたメネラーオスが、娘の窮状を救うべくプティアーアに来て、ネオプトレモスの祖父ペーレウスに浴びせる台詞の一部である。ペーレウスは孫の子（彼にとつては曾孫になる）を生んだ女アンドロマケーをかばいだてしている。つまり息子の仇敵ヘクトールの妻、さらには息子の踵に矢を打ち込んで殺した者の義理の姉だった女性をかばっているわけで、メネラーオスがみれば敵かたき）そのものをかばうも同然であり、パリスの名前はきわめて効果的なのである。次の例はパリスの母ヘカペーの言葉である。

わたくしになら情けは無用、テティスの息子を矢で射殺したパリスの母親はこのわたくしなのですから⁶。

トロイアを破壊しつくしたギリシャ軍はいよいよ帰郷という段

取りになるが、アイガイオス（エーゲ）海が荒れて船を出せない。アキレウスの亡霊が現れ、「俺の墓に犠牲を捧げないうちは、波風を立ててやる。」とおどしているのだ。そこで彼らはトロイアの王女ポリュクセイネーを選び、オデュッセウスが使者として母親のところへ来た。ヘカペーは「アキレウスを殺したのはパリス、パリスの母はわたくし。わたくしを犠牲にしなさい、娘にはなんの咎もないのだから^十。」とオデュッセウスを説得しようとする。ここでもアポローンの名前は意味をなさない。

さて最後にアポローンとパリスが協力してアキレウスを倒したとする^三の説であるが、『イーリアス』に二例、その他がある。まず『イーリアス』の例を挙げよう。

だが今から考えておくがよい、いずれおぬし（アキレウス 引用者注）が神々の怒りを買^{十一}う因に、このわたしになるかも知れぬことをな、パリスとポイボス・アポロンとが、スカイア門の辺りで、おぬしを いかにか豪勇の士とはいいえ

討ち取るその日のことだが^{十二}。

ヘクトールは城門に迫るアキレウスに挑み、相手の槍で喉をつらぬかれて倒れる。彼の最後の頼みは「死骸を両親に返して欲しい。」というものだが、アキレウスは聞く耳をもたない。それで右の捨てぜりふを吐いてこきれる。これはヘクトールが

自分の仇を討ってくれる者として、神のかたわらに弟の名前を添えているわけで、ある意味では尋常なことばである。パリスは頼りにならないのだ。

もう一つは、アキレウスが乗り回す神馬クサントスが、人間のことばを発してアキレウスに語りかけている。アキレウスは、二頭の馬がかつてパトロクロスの遺骸を置き去りにした、となじる。クサントスは、それはアポローンがヘクトールを助けて手柄を立てさせたことであり、自分たちの落ち度ではないとし、次のように言い加える。

さる神とさる勇士との手にかかつて最期を遂げるのは、あなた御自身に定められた運命なのです^{十三}。

なぜか神馬クサントスは実名を使わないが、むろん「さる神とさる勇士」はアポローンとパリスのことである。『イーリアス』には、前にみたようにアポローン単独説もあるから、ホメーロスは、この使い分けをさして気にしなかつたようだ。

ローマではウエルギリウスが^三の例証を残している。波路の果てにイタリアはクーマエにたどりついたアイネイアースは、この地に立つアポローンの神殿に赴き、新天地での行く末をうかがうべく神に祈る。

ポイボスよ、絶えずトロイアの由々しい試練を哀れまれ、ダ

ルダニアの矢とパリスの手をアイアコスの裔の体に導いてく
 ださったポイボスよ^{十五}

ダルダニアの矢はトロイアの矢のこと、アイアコスの裔はアキ
 レウスのことである。これはパリスの行為にアポロンが手を
 貸したとするモチーフの典型的な例である。かくして、この³
 の説はホメーロスを濫觴（出典をたどれるという意味で）とし
 てはるか後のローマに至った一つの伝統だったことになる。ク
 イントウスはこのウエルギリウスよりさらに約三百年ほど後の
 ローマ帝政期に世に出た詩人である。なぜクイントウスはアポ
 ローン単独説を選んだのか。

五 むすび

その答えのヒントになるのは、前に引用したソポクレスの
 劇『ピロクテース』での二人のやりとりである。「アキレ
 ウスは亡くなったのか。」とピロクテースに問われたネオ
 プトレモスは、「ポイボス・アポロンが倒したのです。」と答
 える。するとピロクテースは、「では、倒された者はかりで
 なく、倒した方も立派だったことになる。」と論評する。神に
 等しい比類ない英雄が、人間にではなく神に倒されたのは、そ
 の資質にふさわしい待遇を受けたことになり、アポロンのほ
 うも、雑兵ではなく、そのようなアキレウスを倒したので立派

である、ということであろう。物語の経過からしてピロクテ
 テースは、アキレウスが死んだことすら知らなかったわけで、
 この時点でパリスの名前は当然出てこない。アキレウスが神に
 倒されたのは立派だというだけである。

そのパリスが一人でアキレウスを倒した、とするのは悲劇詩
 人に好まれたモチーフらしいが、これは作品の緻密な構成、文
 脈のなかで必然的に要求される名前なのである。そこにアキレ
 ウスの名譽のためにアポロンの名前を出すと、むしろぶちこ
 わしになる。

クイントウスは、悲劇詩人とは違って、文脈にとらわれる必
 要はなかった。しかし彼にとつてパリスという名前は忌避すべ
 きものだった。『トロイア戦記』第三巻は、アキレウスの最期
 を語ることによって、作品の前半における一つの頂点になって
 いる。名譽の位置である。アキレウスを仕留めるのは人間であつ
 てはならないのだ。このことは、殺されるアキレウス自身がつ
 とによく心得ていた、という形でクイントウスはこの頂点を示
 す。

こんなことは以前にいとしい母が俺に予言した。この神の矢
 にかけられてスカイアイ門の近くでみじめに殺されるだろう、
 と^{十五}。

これはアポロンが致命的な矢を放ち、地面に倒れたアキレウ

スが述べることではある。このことばと、その直前に吐き出される思いとのつながりは明瞭である。

俺には分かつているが、地に住む英雄は一人として俺に近寄って槍で倒すことはできない、そいつの胸がどれほど大胆な勇気にみちていても、この上なく豪胆な心をもちがねでできた人間であつてもな^{十七}。

だからパリスはアキレウスの相手にならないのであり、神が相手であつたからこそ、あのようにあつけない最期を迎えたのである。

このことは『イリアス』でも語られている。アキレウスとヘクトールの一騎打ちの前哨戦のような形で、トロイアの猛将の一人アイネイアースがアキレウスに挑戦する場面がある。アイネイアースが、トロイア王子リュカーオンに変装したアポロンに煽りたてられた結果である。トロイア方にあつて一人神々の厚意を忝くするアイネイアースは、最初は、彼我の差を心得た者として謙虚に次のように答えている。

されば普通の人間ではアキレウスとまともに戦つことはできぬ。彼の傍らには、禍難を防いでくれる神が必ず一人ついでおられる^{十八}。

クイントウスにとっては、たとえアポロンに補佐される形であつても、パリスをこの場面に介入させることはできなかったであろう。このあたりのことをヴェイアンは「アキレウスはまず、二人の神の子と戦つた。ペンテシレイアは神に見捨てられるかに見えるにしても、メモノン^{十九}はたつぷりと神の好意を忝くする。そして今度は、一柱の神が彼の前に立ちはだかるのだ^{二十}。」と語っている。

以上で、なぜクイントウスがアキレウス殺害の張本人としてアポロンを選んだか、という考察を終える。

注

- 一 訳文引用は松田訳『トロイア戦記』(講談社学術文庫、二〇〇〇年)から。
- 二 Pindaros, *Pythian*, 6, 28ff.
- 三 Quintus, 2, 540-1. 『トロイア戦記』 八二頁。
- 四 F. Van, *Quintus de Smyrne, La suite d'Homère*, I, p.91, n.3.
- 五 *Il.* 21, 277-8. 松平千秋訳『イリアス』(上)二八九頁(岩波文庫、一九九二年)
- 六 Sophokles, *Philoctetes*, 333-5. 片山英男訳『ギリシア悲劇全集』4、三一一頁(岩波書店、一九九〇年)
- 七 Sophokles, *ib.*, 336. 片山英男訳、前掲書、同頁。

- 八 『ギリシヤ悲劇全集』 6、六〇七頁。
- 九 Horatius, *Carmia*, 4, 6, 1~5.
- 十 Euripides, *Andromake*, 655~6.
- 十一 Euripides, *Hekabe*, 387~8. 丹下和彦訳、『ギリシヤ悲劇全集』 6、一一三頁。
- 十二 ポリュクセイネーはプリアモスとヘカベーの娘。生前アキレウスは、アポローン神殿で犠牲をささげるこの乙女をみて心をひかれたが、ヘクトールの反対で結婚できなかった。
- 十三 *Il.*, 22, 358~360. 松平千秋訳『イリアス(下)』三三三~四頁。
- 十四 *Il.*, 19, 416~7. 松平千秋訳、前掲書(下)二四六頁。
- 十五 Vergilius, *Aeneis*, 6, 56~8.
- 十六 Quintus, 3, 80~2. 『トロイア戦記』九四頁。
- 十七 Quintus, 3, 72~5. 前掲書、同頁。
- 十八 *Il.*, 20, 97~8. 松平千秋訳、前掲書(下)二五五頁。
- 十九 F. Vian, *op.cit.*, pp. 91~2.